

三木稔フォークオペラについて

梶 名生子

1972年日本オペラ協会が委嘱し、75年に初演、ジロー・オペラ賞の作曲賞を受けた《春琴抄》が三木稔のオペラ処女作である。この《春琴抄》委嘱から1週間違いで声がかかり、イギリスオペラ界がウエーバーの「オベロン」以来153年ぶりに外国人に委嘱したとして話題を呼んだ《あだ》は英語で作曲され、1979年ロンドンでブリテン並みの成功とうたわれた初演がなされた。母国語であれ、外国語であれ、長大なオペラを書いて成功させた自信が、2006年《愛怨》初演まで33年を要して完成した『日本史オペラ8連作』という、世界に例のないライフワークに取り組む作曲者の原動力となったのである。

その一方で、心からオペラや演劇を愛した三木は、それら大オペラと違って、パワフルな声や多数の器楽がなくても、またオーケストラピットを持たないホールでも上演でき、ミュージカルのようにセリフ部分を持ち、オペラ専門家でない他分野のアーティストの登場もありうる音楽劇を、シリーズで書き進めたいという強い欲求を持っていた。そこには、オペラへの知識を問わず、より幅広い聴衆が受容できなければ日本のオペラの将来はない、という危機感が人以上にあったからだという。

三木はその様式をフォークオペラと称し、今回初演される《幸せのパゴダ》まで長編のものだけで4作が完成されたことになる。

その第1作は1983年、芸団協創立10周年に委嘱された《うたよみざる The Monkey Poet》で、台本は川村光夫（後に英語版：Colin Graham）が通常の演劇のために書いた戯曲から、ミュージカルとして書き改めた台本をもとに作曲した。「猿婿話」という、日本中どこにもある昔話を基に、里村と猿村の対立で起こる現代の差別問題に通じるテーマの台本は、分かりやすくリズムカルな東北弁でしゃべられるが、三木は「むかしむかしがあるけずおん」という最初の歌詞とそのアクセントを見て、2時間近い全曲の構想が浮かんだと書いている。

登場人物は：Sop、M-Sop、Alt、Ten、Bar、B-Bar というバランスの取れた声域の主演、村人たち＝猿たちは活躍部分が多く、声域よりもむしろキャラクターで選ぶ6人のコロス。楽器編成はアジアの民族楽器のみでミニ管弦楽。管は笛・尺八(または中国笛子)の持替、弦は新箏(21絃)、打楽器はガムラン楽器が

大活躍し、2人のうち一人は指揮を兼ねる。三木はこの楽器群のために舞台前面の左右に各2名が入れる「楽座(がくざ)」を考案、音響効果のいいその場所でスコアに書かれた音楽を演奏するのみならず、そこから、せりふ部分の芝居をも囃し立てつつ音楽が作品と一体化する彼の理想の一端に辿りついた。

また、上演時間：1時間50分の中に《あるけずおん》、《ホイホイ節》、《草取りの歌》、《山入りの歌》、《姫こが村さやって来た》、《山一の人間修行》、《しっぷぐ しっぷぐ》、《猿さん》など、一度聞くだけで忘れないという音楽ナンバーがずらりと並ぶ。

三木は、この理想の作品でさえ再演が難しい日本の音楽劇の現状に我慢がならず、1986年自主的にオペラシアター「歌座」(最初うたよみ座)を創立、演出：ふじたあさや、振付：西田暁、音楽監督：友竹正則の協力を得て《うたよみざる》は1990年に芸術祭賞を受賞。自らのプロデュースや、文化庁「本物の舞台芸術体験事業」などでの全国上演はその後260回に達した。

歌座は、三木が大オペラの連続で時間を取られて預けた制作者の不都合で、名義の使用もならず活動を停止。数年陽の目を見なかった《うたよみざる》は、この作品の経験者が多い東京室内歌劇場が、文化庁「本物の舞台芸術体験事業」を始め、一般公演でも2008年より全国展開で上演活動を開始するそうだ。

三木は歌座の主宰者として《うたよみざる》に続く次のフォークオペラ創作の題材を模索していた。たまたま歌座創立の1986年、世田谷美術館開館記念に依頼されて作曲した45分ほどのポエムジカ《蛙ファンタジー》(寺崎裕則作)という作品があった。このシンセサイザーも使う、自身新機軸の音楽を生かしたかったため、蛙を扱った草野心平の詩や散文を集めては作曲を積み重ねていたことが、次作《よみがえる》誕生につながった。当時歌座の座付き作者として歌手たちの育成にも協力してくれていた、ふじたあさやに台本・演出を依頼。歌座が《うたよみざる》で資金を蓄積できた1992年、全2幕のフォークオペラ《よみがえる》は東京と仙台で初演された。

この作品も時代は現代。三木は日本の不特定の砂川原や水田でおこる擬人化された蛙世界を舞台に、上演時間：1時間26分(音楽総時間：1時間12分)で蛙社会の四季と喜怒哀楽を描き、自然のリズム感満載のオノマトペを駆使した生命讃歌を歌ったという。また、東アジアの水田幻想をもとに、蛙世界に託した反戦・反核・環境保全への願いがこのフォークオペラに込め

られた。

登場人物は各声域の 11 人の多彩な主役・準主役の各役を中心に構成できる混声合唱。楽器編成は初演の笛・尺八、打楽器+Synthe の版と、大阪カレッジオペラハウスが上演した折の、オーケストラ (1.1.1.1-1.1.1.0-Synthe, 2 Perc, Str) 版がある。

草野心平の名詩に付けた《秋の夜の会話》、《ゆき》、《ゴビラップの独白》、《さくらちる》、《カップ・カップ》、《かわはらの月の花》、《誕生祭/口上》、《るるる葬送》、《るるるよ》、《月に歌うりりり》、《恋の二重唱》、《蛇をのんだ蛙》、《蛇祭り行進》、《地球さま》、《蛙の声明》、《誕生祭讃歌》などの音楽ナンバーは、そのまま単独の演奏でも大いに歓迎されよう。

三木は 92 年 1 月初演のオペラ《ワカヒメ》が終わるや否や、《Z 協奏曲》、《舞》、《黄の鐘》という器楽の大作を書き、《ワカヒメ》の東京初演を挟んで、休む間もなく 93 年 11 月初演の《静と義経》という、またもや大グランドオペラの作曲にかり立てられた。そして《静と義経》が書き上がってすぐ、鎌倉でのその練習に毎日出ながらも 10 月から 12 月にかけて第 3 のフォークオペラ《照手と小栗》の作曲に集中する。この 2 年間、自身が創立した幾つもの団体の監督・プロデューサーも含め、家族も巻き込み、常識では考えられない超多忙の中で、上演時間：2 時間 13 分を要し、11 人の主役・準主役、混声合唱、女声合唱、ほか 8 ダンサー、8 アクターという豪華極まる出演者に、舞台上に別表の楽器を 3 群に分けて配置する全 2 幕のフォークオペラ大作が 93 年の大晦日に完成した。その規模からいって「日本史オペラ連作」の中世の部に加えるべきかも知れないそのスコア最終ページの日付を見て、練習場では感動の喚声が上がったようだ。

名古屋市文化振興事業団 10 周年記念委嘱のこの作品は、原作：説経節より台本：ふじたあさや。15 世紀題材で常陸から熊野までの各地、さらには地獄も現れて時空を駆け巡る、波乱万丈の著名な物語。

音楽は、説経の徒と各役が語りに歌い継ぐことを基本とするが、《ひと引きひいたは千僧供養、ふた引きひいたは万僧供養》、オーケストラ《小栗と大蛇の踊り》、合唱とオケ《照手と小栗の出会いと踊り》、オーケストラ《女たちの踊り》、遊女たちの歌と踊り《忍ぶ軒端に》、同《昨夜の夜這い男》、オーケストラ《地獄の情景》、照手《何の因果のご縁やら》、《照手と小栗の二重唱》、オーケストラ《遊女たちの踊り》、全員での《終曲・めでたかりけり》など独立した音楽部分も多い。

こういった大規模作品にもかかわらず、《照手と小

栗》は、東京初演を含め 20 世紀中に 19 ステージ上演されている。

《照手と小栗》のあと、組オペラ《隅田川+くさびら》、《源氏物語》、《愛怨》と日本史オペラの創作が連続と続き、久しぶりのフォークオペラが、今回徳島で開催される国民文化祭のグランド・フィナーレで初演される[《幸せのパゴダ》](#)。創作の経緯やストーリー・音楽構成については、[ここをクリックして詳細を見て欲しい](#)。

この 4 作の長編フォークオペラの他に、フォークオペラの系列に入れるべき合唱オペラがある。1983 年に名古屋のグリーンエコー委嘱で山崎正和の台本に作曲した 1 時間 45 分 (音楽総時間：1 時間 22 分)、11 景 (2 幕) の合唱が活躍する《峠の向かうに何があるか》である。1992 年の《オロチ伝》は 40 分の 1 幕物だが、せりふ部分は殆どないフォークオペラで、歌座はこれとオペレッタ《牝鶏亭主》をダブルビルで上演した。更に反核ミニオペラ・音楽劇・モノオペラというべき「歌楽」作品を併せると、三木のオペラ的舞台作品は別表のごとく 22 作を数えることになる。

(かじ・なおこ。三木稔長女。東京音大高校卒。学習院大学哲学科卒。ニューヨーク州立大学短期留学。ジャパン・アーツでコンサート随行通訳を経て、青少年の国際交流、語学教育等に携わる。父のファイルした資料と対話を基に執筆)